

J. E. ケアーンズの『金問題の 解決のための論評』について

On J. E. Cairnes' *Essays towards a Solution of the Gold Question*

片桐 謙
Katagiri, Ken

ABSTRACT

This paper examines J. E. Cairnes' *Essays towards a Solution of the Gold Question*. In these essays, Cairnes examines the mechanism of the price changes caused by the Australian gold discoveries, and the processes by which the new gold gradually spreads throughout other countries. He finds that the increase in gold production had three effects on general prices and on the value of gold itself.

1 はじめに

本稿では、19世紀半ばの金発見の影響に関するJ. E. ケアーンズ (John Elliot Cairnes) の理論を考察する。そのための視角は、古典派の「二分法 (dichotomy)」と「貴金属の自然の配分 (natural distribution of the precious metals)」の二つである。

貨幣の中立性は、貨幣の外生性と共に、古典派の貨幣数量説の根幹をなす。それによれば、貨幣量の変化は、財の生産・消費、雇用、賃金、そして利潤等の実体経済には何ら影響を与えず、一般物価水準を比例的に上昇させるのみである。ここから実際の経済をあたかも物々交換経済であるかのようにとらえ分析した

(1) 本論点に関する代表的研究は、Bordo (1975) である。この他、Angell (1926), pp90-95, Wu (1939) pp191-200, 参照。

うえて、貨幣は実体経済を覆うヴェールに過ぎないとみなした。そして貨幣数量説によれば、生産量 (Y) の伸びと流通速度 (V) が一定と仮定すると、貨幣数量方程式 $MV = PY$ より、絶対価格である物価水準 (P) とマネーサプライ (M) との間に対応関係が成立し、しかも P は M に比例して決まる。他方で、相対価格はミクロの需給によって決まる。つまり物価水準は貨幣要因で、相対価格は実体要因で決まる。インフレ率と相対価格変動は別物であり、両者の間には相関がないと考える。これがいわゆる古典派の「二分法」である。

金本位制のもとで、貨幣金はマネタリーベースの一要素であると同時に、一国の銀行券発行量に上限を画すから、一国の保有する貨幣金ストック量はマネタリーベースの供給量を左右する。A 国で金が発見された場合、当該国の金融当局による金購入を通じて、マネタリーベースの増加およびマネーサプライの増加をもたらすであろう。そして貨幣数量説によれば、A 国の物価水準は比例的に上昇する。この場合、相対価格変動には何らかの影響が及ぶのか否か、そして及ぶとすればどのような作用が働くのか、という問題がある。マネーサプライ、物価水準、そして相対価格変動、これら三者の関連を、19 世紀半ばの金発見に関してケアンズの所説を明らかにすることが、本稿の第一の目的である。

更に、この生産が増加した金は世界の各国間で、どのような流入出を辿るのだろうか。金属本位制のもとで相互依存関係にある各国間の国際的な貨幣的均衡を、古典派は「貴金属の自然の配分」で説明した。それはリカードの以下の文章に表わされている。

「金と銀が流通の一般的媒介物として選ばれてきているので、それらのものは、商業上の競争によって、もしもこのような金属が存在せず、諸国間の貿易が純粹に物々貿易であるならば起るであろうところの、自然の通商に適應するような割合で、世界の異なった国々のあいだに分配されるのである。⁽²⁾」

「世界の諸商品を流通させるために使用されてきたもろもろの貴金属は、…すでにそれらの国々の商業や富の状態、およびそれらにともなってそれらの国々

(2) Ricardo (1821) p137, 邦訳 159 ページ

がおこなわねばならなかった諸支払の額やその度数におうじて、地球上の異なった文明諸国民のあいだにある比率で分配された……。そのように分配されるかぎり、それらの貴金属はどこにおいても等しい価値を有し、また実際に使用される貴金属への各国の必要度は同じであったから、いずれの国においても、それらの輸入もしくは輸出にたいする誘因はまったく生ずるはずがなかったのである。⁽³⁾」

リカードウによれば、貴金属の自然の配分は、各国の相対的な貴金属需要によって決定される。そしてそれは、実質所得、実質現金残高、流通速度によって決まる。このようにしていったん、世界の諸国間で正貨ストックが配分されたならば、貴金属は世界中で同一の、生産費に照応する価値をもち、流出入は生じない。

先の例のように金生産国 A 国で金生産が増加した結果、A 国で生産された財の価格は、非金生産国 B 国で生産された財の価格に対して、相対的に高くなるため、A 国から B 国への輸出は減少し、逆に A 国の B 国からの輸入は増加する。A 国は貿易赤字、B 国は貿易黒字となり、金は A 国から B 国へ流出する。こうして貿易収支の調整を通じて金の移動と物価変動が金本位国全体へ波及してゆき、貴金属の自然の配分が回復されると考えたのが、ヒューム流の物価・正貨流出入メカニズムである。

このような貨幣数量説の立場から、リカードウは「貨幣を財貨と交換に輸出しようとする誘因、あるいは不利な貿易差額とよばれているものは、けっして過剰な通貨以外の原因からは生まれない。」⁽⁴⁾と結論付けた。更に通貨学派は、このリカードウの考えに基づき、金紙混合流通のもとでは銀行券の過剰発行を防ぐため、発券を貴金属の流出入によって、あるいは為替相場によって統制しようと考えた。それを制度化したのが、1844 年銀行法である。

これに対して、ケアンズは、物価・正貨流出入メカニズムを否定し、通貨学派および 1844 年銀行法を批判した。⁽⁵⁾ そのケアンズの「貴金属の自然の配分」論と、

(3) Ricardo (1811) p52, 邦訳 65 ページ

(4) Ricardo (1811) p59, 邦訳 73 ページ。「鑄貨が輸出されるのは、それが安価だからであって、そのことは不利な貿易差額の原因ではあっても、結果ではない。」Ricardo (1811) p61, 邦訳 76 ページ

金生産の増加に伴う貴金属の再配分のメカニズムを明らかにするのが、本稿の第二の目的である。

2 オーストラリアにおける金発見とケアンズ

19世紀の世界の金生産において、顕著な増加を示したのは、1848年と1890年に始まる二つの局面である。1848年のカリフォルニア、1851年のオーストラリアでの金発見によって、19世紀前半と比べて、1850年代には金生産は飛躍的に増加した（図1）。これに伴う経済的影響に関して、1850-60年代に中心的議論となったのは、金の価値は既に低下したのか、それとも今後、低下するのか、という点であった。⁽⁶⁾ ケアンズは、1858-60年の四つの論文で、この「議論をより洗練された水準に引き上げ」⁽⁷⁾、金は既に減価している、と結論付けた。これら一連の論文を纏め、導入と二つの補遺を付け加えたのが、本稿で考察する『金問題の解決のための論評（*Essays towards a Solution of the Gold Question*）⁽⁸⁾』である。

『金問題の解決のための論評』におけるケアンズの目的は、一方では、新産金の増加が、一国内ではそれに対応する貨幣価値の下落、そしてあらゆる商品価格の一律の上昇をもたらし、更に国際的には産金国、非産金国を問わず、一律の物価上昇をもたらすと考える機械的な貨幣数量説に対する批判にあった。19世紀半ばの金発見以後、あらゆる商品価格が一律に上昇したわけではないという現実直面して、貨幣数量説は、その原因を金生産の増加以外の目的に求めねばならなかった。また国ごとにも物価動向は異なった。「貨幣供給の増加によるその価値への作用に関する最も一般的な意見は、貨幣の減価は、この原因から生じる限り、一律である、すなわち、あらゆる商品に対して同じ程度で生じるというも

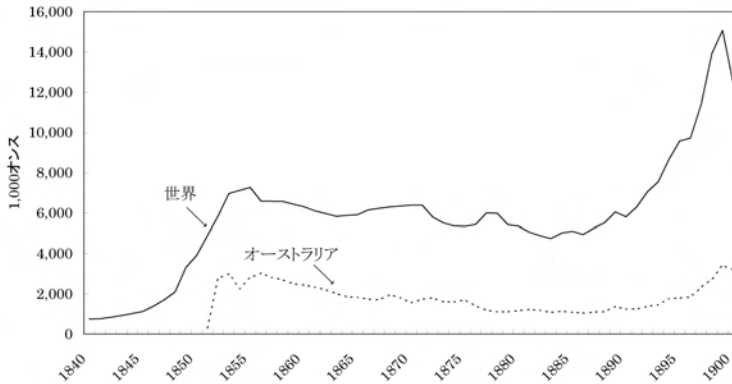
↙(5) 片桐（2008）、参照。

(6) Fetter（1965）pp246-249, Goodwin（1970）

(7) Fetter（1965）p246

(8) Cairnes（1873）第1論文は *Frazer's Magazine*, September 1859 に、第二論文は *Journal of the Dublin Statistical Society*, vol.2 Part13, 1859 に、第三論文は *Frazer's Magazine*, January 1860 に、第四論文は *The Edinburgh Review*, July 1860 に発表された。このうち第二論文は、Web サイト（<http://www.tara.tcd.ie/handle/2262/9340>）に公開されている。

図1 世界とオーストラリアの金生産



(注)1850年以前のオーストラリアの金生産のデータは得られない。

(出所)世界の金生産は、U.S.Congress(1982)pp188-189、オーストラリアの金生産はCommonwealth of Australia(1966)p176、より作成。

のである、それ故、物価は、貨幣の増加によって影響を受ける限り、一律の上昇を示すはずである、というものであった。実際の物価動向では、そうした一律性は観察されず、それが生じている限り、上昇はこの原因によるのではないという推論は当然である、すなわち、貨幣価値が低下しているのではなく、商品の価値が上昇しているのであると。⁽⁹⁾

そこでケアンズの目的は、「金発見の結果として、予想される金の減価を主張するだけではなく、減価の作用、言い換えれば、究極的な物価の高水準に達する、その上昇の順序⁽¹⁰⁾」と「異なる国々で経験されるであろう物価動向の順序⁽¹¹⁾」を説明することにあった。前者は相対価格変動の問題、後者は国際的な調整メカニズムの問題である。

他方で、ケアンズは、同時期の物価上昇を、金生産以外の「取引の発展、供給と需要の変化、ストライキの作用」といった要因によって説明するのは「解決すべき問題の本質に関する基本的誤解⁽¹²⁾」だと批判した。その根拠は、たとえこ

(9) Cairnes (1873) pp55-56

(10) Cairnes (1873) p9

(11) Cairnes (1873) p11

(12) Cairnes (1873) p4

これらの要因によって物価が上昇したとしても、「貨幣供給の増加が物価上昇という現実の必要条件か、否か」⁽¹³⁾という問題は依然として残るからである。

ケアンズは需要・供給の変動が物価に一時的には影響を与えることを認めながらも、商品価格の上昇の原因は、商品の生産費用の上昇、または貨幣の生産費用の低下のいずれかにあると考え、これら以外に物価を永続的に変化させる原因はないとした。「産業のどの重要な商品価格の上昇も決定的となる時（そして独占は別として）、その事実は二通り—この二通りしかない—によって適切に説明される。すなわち、商品を生産する費用（費用とは貨幣支出ではなく、生産の真の困難を意味する）の上昇、または貨幣を生産する、または獲得する費用の低下、によってである。供給と需要の変化は、実際は、物価に一時的な影響を及ぼすだろう、しかし今、述べた条件を別にすると、それらを永遠に変えることはできない。⁽¹⁴⁾」

「貨幣量の増加によって影響を受ける限り、物価は統一的な上昇を示すに違いない。⁽¹⁵⁾」「生産条件が他の点で同じならば、貨幣の増加は究極的に同じ程度で、すべての商品およびサービス価格に影響を与える傾向がある。しかしこの結果に到達するまでに、一定期間—増加量と商業の一般的状況に応じて、長期またはより短期となる—が経過するに違いない。……このような状況のもとで、漸次的な金の減価の時期を通じて、不均等な結果が修正されないことは多分にありうる。この期間は、現在の生産および分配ファシリティによってさえ、30年から40年以上、容易に延びるかもしれない。この過渡期に、新産金の物価への作用は統一的ではなく、部分的だろう。⁽¹⁶⁾」彼の関心は、この過渡期における新産金の物価への非統一的な、部分的な作用の分析にある。

(13) Cairnes (1873) pp4-5

(14) Cairnes (1873) pp7-8

(15) Cairnes (1873) pp55-56

(16) Cairnes (1873) p56

3 産金国・オーストラリアへの影響

ケアンズは、第一論文において 1851 年のオーストラリアでの金発見が同国に与えた影響を考察する。まず金の発見直後の 2 年間には金の収益率の上昇に伴い、一定量の金を得るのに必要とする労働量が低下したため、一日あたりの金採掘者の賃金は発見以前の 3-5 シリングから 20 シリングへと、4 倍以上に上昇した。しかし 1853 年を境に金の収益率は低下し、1857-58 年の同賃金は金発見直後の 1/2 の 10 シリングに低下した。結局、1859 年の時点で金採掘者の賃金は、金発見以前の 2 倍以上に上昇したことになる。そしてオーストラリア国内では賃金の一般的上昇が生じた。雇用者は利潤を維持するために、賃金の上昇分を製品価格に転嫁したため、オーストラリア生産物の価格は上昇した⁽¹⁷⁾。

ところが金発見から物価上昇までにはタイムラグを伴った。それは「流通が拡大する可能性⁽¹⁸⁾」、すなわち金貨がマネーサプライに追加されるまでの期間、に依存する。オーストラリアには造幣局が存在しなかったため、採掘された金地金をいったんロンドンへ輸出し、铸造したうえで再輸入し、それには 6-8 か月の期間を要した。その過渡期には金の価値と金の費用との乖離が生じた。物価は、金の費用によって規定される「自然の水準」を大幅に下回った。通貨の価値は、「自然の費用水準」を上回った⁽¹⁹⁾。金価格は 1 オンスあたり 40-60 シリングと、イギリスの铸造価格 3 ポンド 17 シリング 10 1/2 ペンスを下回った⁽²⁰⁾。イングランドからソブリン金貨が到着すると、1852-53 年には、金価格は铸造価格へ上昇し、商品価格は「自然の水準」に上昇した⁽²¹⁾。

ケアンズによれば、産金国における金の収益率は、金で測った金採掘者の賃金および利潤を規定し、前者の上昇・低下は後者の上昇・低下となる。それに対

(17) Cairnes (1873) pp22-24

(18) Cairnes (1873) p41

(19) Cairnes (1873) p42

(20) Cairnes (1873) p25

(21) Cairnes (1873) pp25-26

応して、金の費用は低下・上昇し、金の減価・増価が生じる⁽²²⁾。そしてこれは他の産業部門の賃金および利潤の、つまり物価の、上昇・低下を生じる。オーストラリアの金の発見以後、金の収益率が2倍になったことは、金生産の賃金および利潤が2倍になったことを意味し、金の費用が1/2に低下したことである。このことは、金発見に続く「金の価値の攪乱」、あるいは「商品の金価格の攪乱」が無限に続くわけではなく、「その変動が向かう点が存在すること、そしてその点を超えて、上昇または下落は永続的には続かない」ことを示している。「オーストラリアの物価の自然の水準は、それ故、オーストラリアの金の価値は、金で測った賃金率によって決定された。そしてこれは、…金鉱の平均的収益によって規定された。結局、金の収益率は、または技術的に表現すれば『金の費用』と呼ぶものは、金属の価値を規定する条件で、減価がそれを超えて永遠には続かない限度を設定する⁽²³⁾。」ケアンズは、オーストラリアの物価上昇は2倍までに留まるだろうと予想した。

また、オーストラリアで生じた金の減価が、世界中に波及するか、否かは、「それらの価値を下落させている条件が一般的に、満たされるか、すなわち、『その減価が必然的に伴う供給の増加が、現在の費用で得られるか、否かに依存する⁽²⁴⁾。』

1851年に金が発見される以前、オーストラリアは商品輸出の対価として、外国から金を輸入していた。金の費用は、オーストラリアが外国へ輸出する商品の費用と等しい。この商品の費用は、当該商品生産に伴う「労働」と「制欲」—すなわちオーストラリア生産者の金で測った賃金と利潤—に等しい。金発見以前の1850年に非熟練労働者の1日あたり賃金は金で測って4シリング、年率の資本収益率は10%だった。ケアンズは、このうち金の費用の主たる要素は「労働」であると考え、「制欲」を度外視すると、金の費用は、4シリングで購入する金量と交換される一日当たりの労働である。1851年の金発見により、同じ労

(22) cf. Senior (1830), Mill (1848), 邦訳142ページ。後にケアンズは、利潤はマイナーな役割しか果たさないとし、専ら、賃金が金の費用を規定すると考えている。Cairnes (1863)

(23) Cairnes (1873) p41

(24) Cairnes (1873) p42

働者は1日当たり15-20シリングの賃金、以前の4-5倍の金、を得るようになった。すなわち金の費用は以前の1/4-1/5に低下したが、一方で他の商品の生産費は不変で、同じ労働は同じ量の商品を生産するだけである。このように、産金国・オーストラリアにおいて、金の費用と、労働者の賃金および利潤は、逆方向に変動する。

世界の諸国の物価水準の上昇は、オーストラリアのそれに遅れた。この「オーストラリアの地域的価格水準の商業国家の一般物価水準からの乖離は、必然的結果である。これは、世界の残りの国々との関係で、オーストラリアの商業的位置づけを基本的に変え、また私が述べようとする国内産業および外国貿易における一連の変化が続く⁽²⁵⁾。」ケアンズは金発見に伴う、このオーストラリアの国内産業および対外貿易の変化を、D. リカードウとJ. S. ミルのいう比較優位の原理あるいは比較生産費説によって説明する⁽²⁶⁾。

ケアンズによると、比較優位の原理とは、「ある国が生産上、何か大きな優位性を有しているならば、その優位の程度に応じて、すべての他の産業的営みに対する割り増しとして作用するというのが、経済科学の最も確立された原理の一つ—外国貿易の全理論の基礎となる原理—である。……生産上、例外的なファシリティをもつことによって、当該国が特別の優位性をもたない商品を直接、生産するよりは、その特別のファシリティが当てはまる商品をその他諸国と交換することによって、その他の財への欲求を満たすことは、明らかに、当該国の関心となる。そしてこれは外国貿易を規定する一般的原理であるから、その可搬性と需要の普遍性から、特に貴金属に適用される⁽²⁷⁾。」

この比較優位の原理では、第一に、国家間で商品の「絶対費用」に格差があるだけでは外国貿易は実現せず、外国貿易が成立するための「本質的、かつ十分条件」は「相対費用」に格差が存在することである。「異なる国家間での商品交換

(25) Cairnes (1873) p26

(26) リカードウの比較生産費説がミルによる相互需要説へと変遷を遂げる問題に関しては、行澤 (1974)、参照。

(27) Cairnes (1873) p32

は、交換される商品の絶対費用ではなく、相対費用によって規定される。すなわち外国から輸入される商品が、輸入国よりも輸出国でより少ない労働で生産されるというのが条件ではなく、それが他の何らかの商品—それもまた交換の対象となる—よりも比較的少ない労働で生産されるというのが条件である。⁽²⁹⁾

第二に、彼は「『生産費』とは生産に必要な犠牲で測られる生産の実際の困難のことであり、貨幣で測ろうと、生産物で測ろうと、資本家の支出と収益で構成される賃金と利潤の量ではない⁽³⁰⁾」ことを強調している。「費用」とは「商品生産に伴う『真の困難』を意味し、この困難が克服される労働への報酬に必要な『貨幣量ではない⁽³¹⁾。』」その上で、「生産費」を、リカードは「生産に必要な犠牲で測った生産の困難」と、ミルは「賃金と収益の量」と把握している点も指摘する。⁽³²⁾

金発見によってオーストラリアは、他国に対して生産上、優位性をもつ商品、金をもつことになった。金発見によって費用が影響を受けた唯一の商品は金である⁽³³⁾。それ故、この金に関して比較優位の原理が妥当する。「経済学的に金発見の本質は、……金の調達費用の低下にある。その低下は他の諸国には共有されず、オーストラリアおよび外国生産物の相対費用の変化を含んだ。この変化の結果、……貨幣賃金への作用を通じて、それに応じて外国貿易は変化した。⁽³⁴⁾」オーストラリアで金の生産費が低下し、その一方でその他商品の生産費が不変だったことは、オーストラリアの産業構造に変化をもたらした。オーストラリアは広大かつ豊饒な土地をもつ農業国であるにも関わらず、金発見以後、食糧の輸入国となった。オーストラリアからは外国に対して、オーストラリアで相対的に生産費の低い金が輸出され、外国からは当該国で生産費の低い商品がオースト

✓(28) Cairnes (1874) p310

(29) Cairnes (1873) pp36-37

(30) Cairnes (1873b) p311

(31) Cairnes (1873) p36, fn.

(32) Cairnes (1874) p311

(33) Cairnes (1873) p36, fn.

(34) Cairnes (1873) p37

ラリアに輸入される。このオーストラリアの輸入財は、オーストラリアでは外国よりも低い費用で生産された、すなわち生産により少ない労働と制欲を要した。にも関わらず「農業にとって十分な資源を持つ国（オーストラリアのこと：引用者）」がトウモロコシを輸入する真の説明は、その国が金生産のために比較的より大きな資源を保有するということである。それ故、トウモロコシを直接、生産によってではなく、安価な金という手段を通じて得るほうが収益的である。同じ説明は、最近の貿易取引のすべてにあてはまる。金発見以前に、オーストラリアはチーズやバターを生産していた。しかし今や、これら商品の輸入者となっている。この変化の原因は何だろうか？……オーストラリアがバターを調達するためにもつ自然のファシリティは、我々がこの国で持つよりも優れている。しかし金を調達するファシリティは、我々の程、優れていない。それ故、明らかに資本と労働力を、毎日の農業よりは、金採掘に向けることが、⁽³⁵⁾ 関心となる。」

金の費用が1/2に低下したことにより、金発見以後、それ以前と同じ労働で2倍の金を獲得できるようになった。他方で、それに対応して物価が2倍に上昇したために、オーストラリアの国内生産に関しては、何ら利点は見出せない。しかし国際貿易に関しては、事情が異なる。世界の物価上昇は、金生産地域または国におけるそれよりも緩慢に進む。産金国では、一定の労働で、より多くの金だけでなく、より多くの外国生産物を獲得することができる。それ故、安価な金による利点が⁽³⁶⁾ 生じるのは国際貿易部門に限られる。

1850年代の金の生産増加によるオーストラリアの経済的比較優位は永続するわけではない。いずれ世界の物価は、産金国における金の費用の低下に応じて、上昇するだろう。その結果、オーストラリアにおける金採掘の優位性は失われ

(35) Cairnes (1873) pp37-38

(36) Cairnes (1873) pp39-40, p43 カリフォルニアが、金生産の増加にも係わらず、農業が発展し、食料を輸出している事実に関して、ケアンズは、カリフォルニアが他の国々に対して、食料を調達するうえでの優位性がある点まで、金を獲得するのに享受するそれと同じであることを根拠に、オーストラリアの事例から導き出した原理と矛盾しないという。Cairnes (1873) p35

る。ケアンズは、以下のように予測した。「同じ原理は明らかに、産金国が生産することのできるすべての商品に等しく作用する。世界中の金価格の上昇と共に、金はあまり収益的でない送金となり、他の商品はより収益的になるだろう。最終的に、金の費用の低下に比例して世界中の物価が上昇する、すなわち現在の2倍になるか、または現在の金鉱脈の枯渇によって、金がもはや現在の費用で生産されなくなるまで、この状況は続くだろう。」⁽³⁷⁾

そしてケアンズは、1873年に著した第一論文の「補遺」でこの予測を検証した。⁽³⁸⁾ 1856年から1870年の間に、ビクトリアの年間金生産量は、1,200万ポンドから600万ポンドへ減少し、植民地の非貨幣的輸出は350万ポンドから630万ポンドへ増加し、対外貿易は1,550万ポンドから1,250万ポンドへ減少した。これらは第一論文を執筆した1859年時点での予測通り、「鉱脈の豊かさの度合いの低下」と「海外における物価の上昇」に伴い、輸入の利点は減少し、自国での生産が相対的により収益的になったことを示している。

4 産金国・オーストラリア内での伝播メカニズム

ケアンズは第二論文で、金生産の増加によって金価値の低下および一般物価水準の上昇が生じる「二つの過程」を考える。すなわち、「貨幣需要の拡大を通じる直接的過程」と「供給の縮小を通じる間接的過程」である。

直接的過程は、以下の通りである。金採掘者は賃金の増加に伴い、支出を増加させる。すると商品価格は一時的に上昇する。その後、需要の増加に対応して生産が増大するために、価格は低下する。この生産増大は雇用の拡大を通じてのみ達成される。そして「いったん社会の全員が雇用されると、労働力を求めての一層の競争の影響は、賃金を上げることのみ」となる。資本家は収益を確保するため、商品価格を引き上げる。⁽³⁹⁾ 「いったん賃金が一時的に上昇すると（他

(37) Cairnes (1873) p49

(38) Cairnes (1873) pp50-52

(39) Cairnes (1873) pp57-58

のすべての条件が同じと仮定して)、利潤はそれに応じた価格の上昇によって維持されることは明らかである。⁽⁴⁰⁾」

他方、間接的過程は、以下の通りである。金生産部門以外の主要な産業部門で賃金が上昇すると、当該部門の利潤は平均水準を下回ることになる。その結果、生産は減少し、この商品供給の減少によって、「その生産者を、他の産業の歩みにある人たちと同じ優位に置くであろう点まで」、価格は引き上げられるだろう。⁽⁴¹⁾

そして、これら「両者によって、賃金は上昇し、それ故、結局、利潤を維持するために一般的かつ永続的な価格上昇を必然的にする傾向がある。」⁽⁴²⁾

続いてケアンズは、こうした物価上昇の法則を確かめるために、「第一に、新たな支出の方向へ、第二に、さまざまな種類の商品供給を拡大させるファシリティへ、第三に、それを縮小させるファシリティへ、進まねばならない。」⁽⁴³⁾と述べる。

まず第一の「新たな支出の方向」は、「当然、新規貨幣を保有する人びとの習慣と嗜好によって決定されるだろう。」⁽⁴⁴⁾すなわち、社会的には中位および下位の非熟練労働者階級に属する人びとによる、所得弾力性の低い商品への需要を指している。

第二の「商品供給を拡大させるファシリティ」は、「第一に、機械が生産で用いられる程度に、そして第二に、生産過程が目的を達成するのに時間を要する自然の作用から独立している程度」⁽⁴⁵⁾の二つの条件に基づく。そしてこれら二つの条件によれば、まず原材料と製造物とに、そして前者は動物と野菜とに区分される。ケアンズは、原材料価格は、製造物よりも早く上昇し、原材料のうち、動物の価格は野菜よりも早く上昇すると考えた。

第三の「供給を縮小させるファシリティ」は、「一般に用いられる固定資本の量に直接、比例するだろう。そして固定資本が存在する主要な形態は機械のそ

(40) Cairnes (1873) p58

(41) Cairnes (1873) p59

(42) Cairnes (1873) p60

(43) Cairnes (1873) p60

(44) Cairnes (1873) p60

(45) Cairnes (1873) p61

れである。よって、供給の縮小が最も困難なのは、機械が広範に用いられる生産、すなわち、より高度に完成された製造業においてである。……それ故、製造物は、物価の一般的動向に決して、長期間、先行せず、すべての商品のうちで最も長く遅れるかもしれない。⁽⁴⁶⁾」

これらの考察を通じて、ケアンズは次の結論を導き出した。⁽⁴⁷⁾ 第一に、新産金の増加に伴うマネーサプライの増加によって、最初に価格が上昇する商品は、「生産者階級の消費財」、「とりわけ労働者および熟練工の消費財」である。⁽⁴⁸⁾ 第二に、完成財の価格は、最初は急速に上昇するかもしれないが、供給を急速に拡大できるファシリティのために、長期間、一般物価動向よりも先に進むことはない。他方で、需要増加を過大に見積もった結果、いったん過剰になると、供給を縮小させることは困難なので、その価格はしばらく、正常な水準以下にとどまるだろう。⁽⁴⁹⁾ 第三に、消費財に区分される原材料は、製品ほど急速に増加せず、しばらく、一般物価動向よりも先んじるだろう。そしてこの影響は原材料のうち、野菜よりも動物商品で、顕著である。⁽⁵⁰⁾ 第四に、完成財はマネーサプライの増加の影響を最も受けにくい。なぜなら「間接的作用」の影響を受けるだけで、しかもその間接的作用において供給が縮小しにくいためである。⁽⁵¹⁾

5 国内のおよび国際的伝播メカニズム

機械的な貨幣数量説の主張とは異なり、新産金の増加は、実際には、国際的に一率の物価上昇をもたらさなかった。そこでケアンズは新産金が各国の物価動向へ与える影響を考察する。これは「私を知る限り、この問題を扱っているいかなるエコノミストも気づいていない」⁽⁵²⁾ 彼独自の原理である。

(46) Cairnes (1873) p63

(47) この結論は、Levasseur のそれと同じことを、ケアンズ自身が認めている。Cairnes (1873: p65)

(48) Cairnes (1873) p64

(49) Cairnes (1873) p64

(50) Cairnes (1873) p65

(51) Cairnes (1873) p65

ケアンズは、この新産金の増加が各国の物価に影響を与える、その地理的範囲に関する原理を主張する際に、「地域価格 (local prices)」という概念を指定する。地域価格は、「商品が生産される場所に関して用いるのであり、商品が売られる場所に関して用いているのではない。売られる場所での価格は常に、生産される場所での価格によって決定される。⁽⁵²⁾」

ケアンズはその原理を次のように説明する。「明らかに、一定の範囲の業務を通じて、物価の一定の上昇に必要な金属貨幣量は、それを受け取る通貨の性質によって異なる。通貨の金属の要素が大きければ、必要量の割合は大きいだろう、他方で、信用の要素が一般的になれば、その割合は小さいだろう。⁽⁵³⁾」言い換えれば、一国の通貨が純粋金属流通から成るならば、一定量の鑄貨の追加によって、それと等額だけ流通量は増加するのに対して、通貨における信用の要素が大きければ、鑄貨の追加量以上に、流通量は増加する。その結果、信用制度が発達すればするほど、物価水準の一定の上昇を生じるのに、より少ない追加金量で済む。

ケアンズはこの原理に基づいて以下のように予想した。「イギリスや合衆国—金融システムは大変、効率的である—の金属ストックへの一定量の追加は、流通総額のより大きな拡大をもたらし、それ故、フランス—信用はあまり活発ではない—のような国々の通貨への等量の追加よりも一般物価水準の一層の上昇をもたらすだろう。そしてまたフランスのような国々への影響は、インドや中国—通貨はほとんど純粋金属で、信用は比較的ほとんど用いられない—のような国々でよりも大きいだろう。⁽⁵⁴⁾」

オーストラリアとカリフォルニアの新産金は、まずイギリスと合衆国へ、そしてヨーロッパやアメリカへ、最後にアジアへと行き渡る。それに伴って地域価格の乖離をもたらした。新産金の影響を最初に受けるのは産金地・産金国である。オーストラリアとカリフォルニアの生産物価格は、金発見以前の2倍に上

✓ (52) Cairnes (1873) pp65-66

(53) Cairnes (1873) p68

(54) Cairnes (1873) p66

(55) Cairnes (1873) pp66-67

昇し、金の地域的価値は1/2に低下した。しかし他の国・地域では、物価はそれに対応して上昇しないため、オーストラリアおよびカリフォルニアの外国市場での購買力は増加する。産金国は、その他の国・地域に対して優位性をもつことになる。この新産金は、これら産金国と貿易取引を行うイギリスやアメリカに流入する。これら両国は「貴金属の増加に最も敏感な通貨」をもつ、すなわち信用制度が発達しているため、より少ない金量によって物価が上昇する。この点でヨーロッパ大陸—ケアンズはフランスを念頭においている—よりも有利である。そうして物価が上昇すると、両非産金国は、産金国と等しい商業的優位性をもつことになる。

その後、金はイギリスから、法制上は複本位国、実態上は銀本位国のフランスへ流入する。金は完全に銀を駆逐し、その銀の東洋の銀本位国への流出が、フランスへの金流入を増すまで、フランスの物価上昇を防ぐパラシュートとして作用するだろう。しかしケアンズは、その作用を過大評価すべきではないと考えた。そしてフランスでも同様に物価上昇をもたらした。

最後に、新産金は「最も敏感でない通貨」をもち、純粋金属流通ともいえるアジアへ流入した。「全体的な動きの最終的結果として、イギリスと合衆国の金属システムは、永遠の増加のわずかしが受け取っていないが、インドと中国は莫大な供給を吸収している。前者の国々は、富を最初に受け取るが、それを国内の目的のために必要とはせず、その負担を他国に移転することができる。彼らはそれと交換して、真の富を手に入れる。他方、後者は、受け取るものを必要とし、それを手にすることを強いられる。彼らは、新たな貨幣と交換に、自らの商品を手放した後、それを交替することができない。彼らの鑄貨ストックが増加すると、彼らの幸福の手段は低下し、彼らは金融的攪乱の永遠の犠牲者となる。⁽⁵⁶⁾」

次にケアンズは、これらの地域価格の乖離に対して、「国際的取引の作用が働く調整的な影響⁽⁵⁷⁾」を明らかにする。それは、「中立的市場における、同一商品の

(56) Cairnes (1873) p99

(57) Cairnes (1873) p70

生産者、異なる国々の競争による調整」と「異なる商業国間の、相互の生産物に対する相互的需要」の二つである。⁽⁵⁸⁾ 前者の調整として、例えば、イギリスとアメリカの物価がヨーロッパ大陸のそれよりも高い、物価水準の乖離を考えてみよう。この場合、消費者は物価の高い前者の市場から、物価の低い後者の市場へ向かうだろう。それに伴い、金のフローはイギリスおよびアメリカからヨーロッパ大陸へ向かうだろう。この過程は最終的に両者の物価水準が等しくなるまで続く。この均衡過程は、「同一種類の商品の競争者である国の間でのみ」⁽⁵⁹⁾ 作用する。ケアンズのいうこの調整とは、貿易財で一物一価が成立するという⁽⁶⁰⁾ことに他ならない。そしてこの調整は、「明らかに最も強力で、その作用が広がる限り、即座にいかなる重大な乖離をも阻止する」⁽⁶¹⁾。

他方で、イギリス・アメリカとアジアといった、気候、土壌、一般的物理的条件が異なる、それ故、主要な産業が異なる場合、その生産物は世界市場における需要・供給の原理が適用しないので、この前者の調整は少ししか、または全く、働かない。⁽⁶²⁾ このような国家間では、その代わりに、後者の調整—それは「国際的取引で、相互の需要の作用によって達成される、はるかに弱いもの」—が働く。例えば、イギリス・アメリカの物価水準が、アジアのそれよりも高い状況を考えてみよう。イギリス・アメリカでは東洋の商品への需要増加、アジアではイギリス・アメリカ商品への需要の減少が生じ、イギリス・アメリカからアジアへの貴金属の流出が生じるであろう。ケアンズによれば、通常、この貴金属のフローの原因として挙げられる例えば、ヨーロッパにおける絹の不作は「単に一時的攪乱」に過ぎない。東洋に比べて、イギリス・アメリカの物価は高く、それに伴い貨幣所得も上昇する。「その結果、世界のこれら二つの部分の相対的な債務の

(58) Cairnes (1873) p70

(59) Cairnes (1873) p70

(60) ケアンズは、貿易財として、「すぐには腐敗せず、容易に運べるもの」、「主に食糧、穀物、一般生産の商品」を挙げている。Cairnes (1873:p18)

(61) Cairnes (1873) p70

(62) Cairnes (1873) p71

変化が生じ⁽⁶³⁾、債権国へのトランスファーが生じる。これが「東洋への貴金属の流出」の主要な原因である。増加した金生産の大部分が、まず「高度に弾力的かつ膨張的な通貨」をもつヨーロッパ・アメリカへ、そして小さな割合が、「無感覚かつ非膨張的な通貨」をもつアジアへ流入する⁽⁶⁴⁾。「それ故、価格上昇は、金産出国で生産された商品で最も急激である。そしてこれは金を獲得する費用によって設定された限界の上限に達している。産金地域で商品が生産された後、価格上昇はイングランドと合衆国の生産物で最も急速に進むだろう。他方、新たな貨幣の影響を最後に受ける商品、そしてその影響のもとで価格が最も緩慢に上昇する商品は、インドと中国の生産物である。そしてその経済状況に関して、前者の国々と一般的特徴を共有する限りで、熱帯諸国一般の商品を付け加えることができるかもしれない⁽⁶⁵⁾。」

ケアンズは、こうして導出した「貴金属の供給増加の作用のもとでの、貴金属の減価が確立する一般的原理⁽⁶⁶⁾」、第一に前節で考察した「商品供給が、主に新たな貨幣支出がもたらす需要の変化に調整しうるファシリティに依存する」原理と、第二に本節で考察した「新たな貨幣の、それを受け入れる通貨への作用から生じる」原理⁽⁶⁷⁾、を1858年までのデータを用いて確認した。その際、考慮すべきことは、第一に、信用の拡大によって生じたインフレ期と恐慌の攪乱的影響を排除するため、1857-58年冬を比較の対象としないこと、第二に、技術革新によって製造物価格の低下傾向が顕著なことである。これらを考慮した上で、国家間での物価水準の上昇の度合いは、オーストラリア、イギリス・アメリカ、大陸ヨーロッパ、アジアの順に大きかった。また商品別の価格上昇の度合いは、低いほうから製造物、農作物、鉱物原料、羊毛、牛肉、獣脂だった。これらの事実は、それぞれケアンズの説いたふたつの原理と整合的だった。

(63) Cairnes (1873) p71

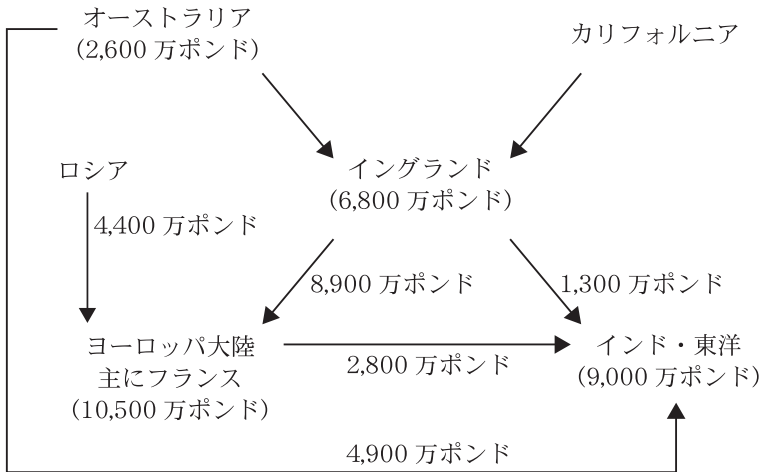
(64) Cairnes (1873) pp72-73

(65) Cairnes (1873) pp73-74

(66) Cairnes (1873) p74

(67) Cairnes (1873) Appendix A-G

図2 1858-71年の新産金の流出入



(注) 矢印の数字は流出入を、国のカッコ内の数字は当該国に留まった分を示す。

(出所) *The Economist*, June 29, 1872, August 3, 1872 より作成。

更にケアンズは、1873年に著した第四論文の「補遺」で、公式の統計および『エコノミスト』誌を用いて、⁽⁶⁸⁾1858-71年の新産金の国際的な流出入を分析した。その内容を簡略化して著したのが、図2である。新産金の主要な三つのルートのうち、オーストラリア・カリフォルニア→イングランド→ヨーロッパ大陸→インド・東洋、が最大のもので、1858-71年に生産された約3億ポンドの金のうち、1.9億ポンドがこのルートを通った。第二に重要なものは、産金国オーストラリアから直接、インド・東洋へ流入するルートで、4,900万ポンドが占めた。第三がロシアから主にフランスへのルートである。これらの事実もまた、ケアンズの原理と整合的だった。

(68) “The Coinage of Gold for Twenty-four Years”, *The Economist*, June 29, 1872, pp798-800, “The Production and Movement of Gold since 1848”, *The Economist*, August 3, 1872, pp954-958, “The Disposal of the Accumulation of Gold in England since 1858”, *The Economist*, August 31, 1872, pp1075-1077

6 むすび

ケアンズは『金問題の解決のための論評』において、新産金の増加がもたらす相対価格変動メカニズムと、新産金が産金国から非産金国へ拡散してゆく過程を分析した。彼によれば、新産金の増加は三つの経路を通じて金価値および物価水準へ影響を及ぼす。

新産金の増加は、貨幣需要の拡大を通じて直接的に、また商品供給の減少を通じて間接的に、金の減価および一般物価水準の上昇をもたらす。ケアンズによるそれに至る両過程の説明は、貨幣の外生性を出発点としながらも、それが実体経済の変動を媒介として、しかも相対価格の変動をもたらすと考えている点で、古典派の「二分法」を克服している。

また 19 世紀半ばに増加した新産金は、産金国からイングランドと合衆国を経て、ヨーロッパ大陸へ、最終的にアジアへと流出入を繰り返した。ケアンズは物価・正貨流出入機構を否定し、信用制度の発展の程度、または通貨構造を導入することによって「貴金属の自然の配分」を説明した。「地域価格」の相違は、その表れである。

ケアンズは、「貨幣の増加量」と「商業の一般的状況」に従い、30年から40年経過すれば、商品間の価格上昇の乖離、国家間の物価上昇の乖離は収斂し、最終的にすべての商品およびサービス価格に等しい変化がもたらされると考えた。

引用・参考文献

- Angell, James W. (1926), *The Theory of International Prices: History, Criticism and Restatement*, Harvard University Press : Cambridge, M. A.
- Bordo, Michael David (1975), "John E. Cairnes on the Effects of the Australian Gold Discoveries, 1851 - 73: An Early Application of the Methodology of Positive Economics" *History of Political Economy*, vol.7 no.3, Fall, pp337-359
- Cairnes, John Elliot (1863), "The Consequences of the Gold Discoveries" *The Economist*, June 27, pp704-706
- (1873), "Essays towards a Solution of the Gold Question" in *Essays in Political*

- Economy: Theoretical and Applied*, Macmillan & Co.: London *John Elliot Cairnes Collected Works* edited by Tom Boylan and Tadhg Foley, vol.IV, 2004, Routledge: London and New York
- (1888), *Some Leading Principles of Political Economy Newly Expounded*, London: Macmillan & Co. *John Elliot Cairnes Collected Works* edited by Tom Boylan and Tadhg Foley, vol.V, 2004, Routledge: London and New York
- Commonwealth of Australia (1966), *Australian Mineral Industry: Production and Trade, 1842 - 1964* compiled and edited by Z. Kalix, L. M. Fraser, and R. I. Rawson, Department of National Development Bureau of Mineral Resources, Geology and Geophysics Bulletin No.81
- The Economist*
- Fetter, Frank Whitson (1965), *Development of British Monetary Orthodoxy 1797-1875*, Harvard University Press: Cambridge, Massachusetts
- Goodwin, Craufurd D. (1970), “British Economists and Australian Gold” *Journal of Economic History*, vol.30 no.2, June, pp.405-426
- Mill, John Stuart (1848), *Principles of Political Economy with some of their Applications to Social Philosophy*, *Collected Works of John Stuart Mill* introduction by V. W. Bladen; textual editor, J. M. Robson, vol.III, 1965, University of Toronto Press: Toronto, 末永茂喜訳『経済学原理 (三)』, 岩波文庫, 1959年
- Ricardo, David (1811), *The High Price of Bullion, A Proof of the Depreciation of Bank Notes, 1810-1811* in *The Works and Correspondence of David Ricardo* edited by Piero Sraffa, vol.III 1962, Cambridge University Press: Cambridge, 蛭原良一訳「地金の高い価格, 銀行券の減価の証拠, 1810-1811年」『リカード全集Ⅲ』所収, 雄松堂, 1999年
- (1821), *On the Principles of Political Economy and Taxation*, *The Works and Correspondence of David Ricardo* edited by Piero Sraffa, vol. I, 1951, Cambridge University Press: Cambridge, 堀経夫訳『リカード全集Ⅰ 経済学および課税の原理』, 雄松堂, 1990年
- Senior, Nassau William (1830), *Three Lectures on the Cost of Obtaining Money, and on Some Effects of Private and Government Paper Money: Delivered before the University of Oxford, in Trinity term, 1829*, John Murray: London
- U. S. Congress (1982), *Report to the Congress of the Commission on the Role of Gold in the Domestic and International Monetary Systems*, vol.1
- Wu, Chi-Yuen (1939), *An Outline of International Price Theories*, Routledge & Kegan Paul Ltd., London, reprint Kraus Reprint: Nendeln Liechtenstein, 1970
- 片桐謙 (2008), 「J. E. ケアンズと1844年銀行法」, 『和歌山大学経済学会 経済理論』 345号, 9月
- 行澤健三 (1974), 「リカード『比較生産費説』の原型理解と変形理解」 森田桐郎編著『国際貿易の古典理論』第二部第二章, 所収, 同文館, 1988年